

委員会視察報告書

委員会名	文教厚生常任委員会
視察地	福島県伊達市
調査項目	「伊達市版ネウボラ」による、妊娠期から子育て期までの切れ目のない子育て世代包括支援について
調査目的	「伊達市版ネウボラ」についての調査研究し、今後の本市における取組の参考とするため
日時	令和8年7月15日（水）午前10時30分～正午
場所	伊達市役所（福島県伊達市保原町字舟橋180番地）
調査概要	【伊達市の概要】 面積：265.1km² 地勢：県都福島市に隣接 森林、農地が65% 人口：56,404人（令和6年3月） 年少人口18.25% 老年人口37.0% 出生数：236人（令和5年） 【伊達市子育て支援の取組】 平成27年3月「伊達市子ども・子育て支援事業計画」策定 平成28年1月「伊達な地域創生戦略」策定 伊達市版ネウボラの構築 平成29年4月「伊達市版ネウボラ事業」の開始 子育て世代包括支援センター「にこにこ」オープン 令和3年3月「子ども家庭総合支援拠点」の開始 令和3年4月「健康福祉部健康推進課ネウボラ推進室」から 「教育委員会こども部ネウボラ推進課」となる 令和6年4月「こども家庭センター」開設 「伊達市元気な子ども・みんなの子育て条例」施行 ①切れ目のない支援を行うための職員の配置 ②子育てを社会で受け入れる取組 ③産後の支援の強化 ④きめ細やかな相談機会の充実 ⑤子供の育ちを促す取組 ⑥子育てを楽しむ仕組みの構築 ⑦保健・福祉・教育の連携の強化

	【伊達市版ネウボラにおける連携の取組と課題】 (取組効果) ○保護者が安定した子育てに向き合うことができ、結果として子供の良い育ちが促される。 ・ 妊娠期から切れ目のない支援、寄り添う支援を行うことで、保護者の不安が小さなうちに対処することができる。結果として、大きな問題になる前に解決され保護者が安定して子育てができる。 ・ 保護者の気持ちが安定すると子育てを前向きに取り組むことができ、親育ちと子供の良い育ちが促される。 ・ 出産・入園・入学等の成長の節目は親子ともに乗り越えるのが大変な時期となるが、以前より親子ともに落ち着いて対処できているように感じる。 ○子供の発達段階、成長段階に合わせて「めざす伊達っ子の姿」を推進できる。 ・ 様々な専門職が、それぞれの専門性を発揮しながら一貫性を持った支援ができるようになった。 ○保健・幼児教育・児童福祉・学校教育の連携の強化により支援者の気付きが増えた ・ 支援者が関わっている場以外の「子供や家庭の様子」が分かり、子供の成長や保護者の思いや願いに寄り添った支援をより意識することができる。 ・ 信頼関係が構築されると保護者の受入れも良くなることを支援者が実感でき、さらに「子供が真ん中」の支援を進めることができる。 ・ 各専門職の視点がわかるので、その時に最適な支援へつなげることができるとともに親自身が様々な相談機関を選べるようになった。 (課題) ○地域の子育て支援の強化 ○支援の質の向上
視 察 の 様 子	伊達市役所での説明

	伊達市議場にて 育児パッケージ
質 疑 応 答	質問 1 ネウボラ推進課の設置経緯と保健・福祉・教育を横断する支援体制および情報共有の仕組みについて 回答 1 子供の育ちを一貫していくためには保健・福祉・教育の連携強化が必要であることから、令和3年4月、教育委員会こども部にネウボラ推進課を新設した。ネウボラ定例会を2か月に1回開催し、各課の事業や課題の共有、今後の推進に向けた話し合いを実施している。 質問 2 「ネウボラ」という名称の市民への周知方法や理解度の現状について 回答 2 令和6年度の子ども・子育てニーズ調査において、ネウボラ事業を「知っている」と回答した者は85%で、就学前の子供を持つ保護者の方々には、ネウボラの存在が浸透していると考えられる。子育て世帯以外の認知度向上が課題となっている。 質問 3 小学校入学まで一貫して同じ保健師が担当する体制の意義と、担当人数及び負荷の軽減策について 回答 3 同じ保健師が担当することで信頼関係を築くことができ、市民が相談しやすく、ネウボラ保健師も保護者、子供の状況理解が深まるため、支援がしやすい。保健師1人につき、就学前の児童150人から250人を担当し、特に丁寧に関わるのは主に就学前の子育て世帯で、より支援が必要なケースは保健担当と福祉担当で行う合同ケース会議で支援方針を決定する。

質問4 スタッフへの専用携帯電話貸与による効果と課題について

回答4 利用者からは「相談先が明確で安心」、「取次ぎが無く相談しやすい」との声があり、円滑な支援につながっている。所持してみると想定を超える負担はなく、時間外の着信は通常業務内で折り返し対応している。

質問5 担当者の異動や退職時における支援の質を維持するための引継ぎマニュアルやケース管理システムについて

回答5 定期異動同様の保健師活動の引継ぎを行っている。「健康かるて」システムを使用し、担当保健師、健診結果、相談や訪問の利用状況が分かるようにしている。

質問6 継続的な支援を担う専門人材の確保策およびスキルアップのための研修・育成の在り方について

回答6 専門職採用は健康福祉部と人事課が協議している。異動職員や新採用職員は伊達市版ネウボラの理念・実践の在り方を共有している。また、外部講師を招き専門研修を実施している。

質問7 育児パッケージ等の物的支援が、心理的支援や虐待予防、産後うつ軽減にもたらす相乗効果と評価について

回答7 育児パッケージ贈呈が妊婦と会うきっかけになり、その後の継続的な「顔の見える」信頼関係の構築につながっている。この信頼関係があることで、出産後の早期の支援が可能となり、産後うつや孤立感の軽減につながり、結果として虐待リスクの低減にも寄与している。

質問8 出生率等の数値以外の「定期的な成果」をどう評価しているか、また現状の課題に対する今後の解決方針について

回答8 項目別で評価している事業がある。課題としては、地域の子育て支援の強化であり、令和8年度は企業との連携を強化及び支援の質の向上である。

委員会所感	【山本博文】 伊達市では、妊娠期から18歳まで切れ目のない支援を行っており、保健、福祉、教育の連携を強化するために、教育委員会内に「こどもネウボラ推進課」を設置し、関連した部署が2か月に1回定期協議を行う体制を構築していた。特に驚いたことは、妊娠期から18歳までを1人のネウボラ保健師が一貫して担当し、更に身近な相談相手として「ネウボラ相談員」や心理士の配置、専用携帯電話（ガラケー）を活用したタイムリーな相談対応や自宅訪問による「育児パッケージ」のプレゼントなどを行っていた。担当者によれば市民にとっての気軽に行ける地域の実家のような関係構築を目指すとのこと。また、予防的介入に取り組むことにより、産後うつリスク低減や、0～1歳児の虐待相談件数の減少、高い子育て満足度（約8割）といった成果につながっている。現在も企業の管理職向けに研修や出張サロンを通じた父親の育児参画、企業との連携の強化を新たな課題、重点施策として考えているとのこと。柏崎市でも検討すべき取組と考え、市へ提案していきたいと感じた。 【池野里美】 伊達市では、ネウボラという考え方を前市長が勉強会で聴いたことで、専門家を招いて職員と研修をし、先進的に取り入れている。また、国に先んじた組織改革も行い、教育委員会に「こども部ネウボラ推進課」を設置。北欧の考え方と同様に、基本的に妊娠の際に面接した保健師が18歳になるまで継続して対応し、まさに、妊娠期から切れ目のない伴走型の支援を行っている。あなたの担当保健師としてネウボラ名刺を渡し、携帯で担当保健師へ直接気軽に相談できる仕組みがある。また、伊達市版ネウボラ事業は「地域の実家」として、何かあっても無くても寄りたくなる場であり、心の拠り所という考え方であり、コンセプトを全ての職員が共有しているということであった。また、健診時には、元保育士や教員免許のある近所のおばちゃんという立ち位置の相談員を配置し、子供や保護者のいい所を褒めたりして相談しやすい雰囲気を作っていると伺った。伊達市では、子育てを個別の家族だけに任せず、専門家の丁寧な関わりで顔の見えるつながりを大切にし、社会全体で支えていく仕組みとなっていることに大変感銘を受け、非常に学びの多い視察であった。 【三嶋崇史】 全国的にも早い時期より「ネウボラ」を推進し、横断的に各課の事業や課題について合同会議を開き情報の共有をしている。基本的に
-------	---

は、保健師が18歳まで同じ人を担当して、1人につき150～250人見ている。切れ目のない子育て支援は柏崎市も先進的に事業を行っているが、育児パッケージは行っていない。出産時のケアに関してパッケージ贈呈の時に様子を伺うことができる利点がある。産後うつや孤立感の軽減を図るために対面重視している伊達市の取組はとても参考になる。ネウボラ相談員は3名配置され、「近所のおばちゃん」をコンセプトにメンタル面や孤立感を防ぐ役割がある。そのためにも親しみやすく話しやすい存在であると感じた。伊達市の子育て世代包括支援は、きめ細やかな配慮と子ども、保護者目線で取り組んでいる。毎月1日は、伊達っ子こどもの日としている事は、子育て事業を重視している証である。

【田邊優香】

今回の視察で特に印象に残ったのは、伊達市が取り組む「伊達市版ネウボラ」による、妊娠期から子供が18歳になるまでの切れ目のない子育て世代包括支援である。妊娠期の不安に寄り添う相談体制から、乳幼児期の家庭訪問、学齢期の発達支援、さらには思春期の悩みに対応する相談窓口まで、一貫した支援が体系的に整備されており、そのきめ細やかさと、利用者の立場に立った運用は大変印象深いものであった。特に、支援の「つながり」が途切れないよう、担当者間の情報共有や支援計画の連続性が丁寧に確保されている点は、子育て世帯の安心感につながる大きな要素であると感じた。相談内容が変化しても、窓口が変わっても、支援が途切れないという仕組みは、まさに子育て家庭の負担軽減に直結するものであり、自治体としての姿勢が強く表れていた。柏崎市においても、子育て支援は他市に劣らない充実した取組が進められている。しかし、伊達市のように、利用者の視点に立ち、支援の流れをより細やかに設計することで、さらに使いやすく、安心して相談できる体制を築く余地があるのではないかと感じた。子育て世代のニーズは多様化しており、その変化に合わせて支援の質を高めていくことが求められている。今回の視察を通じ、柏崎市でも「切れ目のない支援」をより一層推進するためのヒントを得ることができた。今後も、子育て世代がより利用しやすく、安心して相談できる支援の在り方を研究し、議会として積極的に提案していきたい。

【持田繁義】

- ・子供の健やかな成長と親子の幸せを地域全体で育むという、先進的な取組と感じる。国に先駆けた視点もあることから、予算確保はど

のようにされているのか。事業の成果・効果をどのように地域に還元しているのか、学ぶべき事項は豊富である。

- ・「子ども・子育て支援事業計画」や「子ども・子育て交付金（国の伴走型相談支援・経済的支援）」などの国・県補助金を最大限に活用しつつ、一般財源を補填して安定的な予算編成を行っていると思われる。
- ・単に巨額の新規予算を投じるのではなく、行政内部の組織改編（保健・福祉・教育の統合）と人員配置の再構築に大きな視点がある。
- ・国の各種交付金・補助金を貪欲に組み込みつつ、一過性の給付事業ではなく「人を配置し、関係性を築く」ことに予算を割いていること。成果指標（K P I）として「地域への愛着・子育て継続意向」を掲げ、施策の有効性を定期的に検証している姿勢を学ぶべきである。

【重野正毅】

組織的にネウボラ推進課は教育委員会部局のこども部の中にある。柏崎ではあまり聞きなじみのある言葉ではないネウボラだが、このネウボラ推進課は令和3年4月に設置され、こども家庭センターの運営を中心に行っている。前市長の肝煎り事業としてのネウボラの取組ということだが、出産前から18歳まで切れ目のない支援として、今では伊達市自慢の取組になっている。

ネウボラの意義としては子育ての課題を対処療法的に取り組むのではなく、予防的介入をしていくということにあるとしている。妊娠届時からその子が18歳になるまで担当ネウボラ保健師をつけ、あなたの保健師として個別に関わってくれるシステムは特色がありすばらしいと感じた。こういうことで虐待防止を含めた子育ての予防的な介入が可能になると思った。

また、地域で子供を育てるという考え方の下、毎月1日を「伊達っ子こどもの日」として、家族で子供真ん中の日を過ごせるようにしている。その取組を推進するため今年度は企業との連携を深める年としている。柏崎市と同じ問題意識の下ではあるが、より積極的に子育てに関わろうとした取組には学ぶところが多かった。

【相澤宗一】

今回の視察で最も印象に残ったのは、人口減少が進む中であっても、「生まれてきた一人一人の子供を地域全体で大切に育てる」という理念が、伊達市版ネウボラの根幹となっていることである。

事業は、地方創生が進められていた約10年前、日本版ネウボラ構

	想に感銘を受けた当時の市長の発意を契機に始まり、人口減少への危機感と先進的な政策研究が結び付いた取組であった。モデルとなったフィンランドも少子高齢化や厳しい財政状況に直面しているが、全ての親子が安心して健やかに暮らせるよう、問題が起きてからではなく予防的・継続的に寄り添う考え方を大切にしているとのことであった。 人口減少対策では出生数を増やす議論に目が向きがちであるが、生まれてきた子供一人一人の健やかな成長を地域全体で支え、子育て家庭に切れ目なく寄り添うことこそが、安心して子供を産み育てられるまちづくりにつながる重要な視点であると感じた。 理念だけでなく、それを具体的な仕組みとして着実に実践している伊達市の取組は、大いに参考となるものであった。
--	---